302.22
I231

②

0000703000

0000703-000

302.22-I231s

支那人及支那社会の研究

池田竜蔵・著

池田無尽研究所

1931

AAB

この著作物は、著作権者不明のため、著作
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するも

302.22
I231

池田龍藏著

支那人及支那社會の研究

1272

302.22 I 231 A

支那人及支那社會の研究

目次

序
凡例
口繪
第一圖　內山先生福祿壽の說講義の圖
第二圖　支那朝食第二回試食會の圖

第一編　緒論……一

第一章　支那研究の方針……一
——(1)先入主は禁物——(2)白紙主義——
第二章　實地研究の要……三

30185

——(3)官半官賴りの視察者——(4)カント式では駄目——(5)飜譯は危險——(6)視察者の要訣——(7)呆れた外務省官吏——　二
第三章　支那研究に關する注意　……八
第一節　支那の地理　……八
——(8)廣漠たる支那——(9)日本式の解釋——
第二節　文字通りの特種國支那　……一〇
——(10)國民經濟なき支那——(11)歐米社會學は不適用——(12)支那の極貧者問題——
第三節　支那の通貨　……一二
——(13)通貨は貨幣プラス物——(14)支那人の通貨觀念——(15)通貨觀念相違の誤解——
第四節　支那文の正讀　……一四
——(16)漢籍より離脱——(17)時文六分說——(18)使用文字の間違ひ——(19)松江之鱸と解放——

第二編　本論　……一〇
第四章　支那人の本體　……一〇
第五節　支那人の社會人性　……一〇
第一款　國民性なき支那人　……一〇
——(20)國民性の研究——(21)日支人の個性の行方——(22)徹底せぬ支那人觀——
第二款　支那人本能の特質　……一四
——(23)支那人の基調は特種本能——(24)本能表現の特異性——(25)計畫的本能主義の意義
第三款　支那人本能の實體　……一六
——(26)自己及種族保存本能——(27)生命第一主義——(28)支那の匂ひ——(29)沒有法子
——(30)性中心主義——(31)內山先生の福祿壽の說——
第四款　本能滿足の社會的手段　……三一
——(32)本能と力——(33)力の集合としての互助——(34)自己本位の互助——(35)支那式

宣傳の哲學——(36)輿論としての路上陪審——……三五
第六節　社會人性形成の原因
——(37)不可抗力な自然の暴威——(38)搾取階級の跋扈——
第七節　互助的精神の二大具象……三七
第五款　集合人力としての帮……三七
——(39)帮の本質——(40)各種の帮——
第六款　集合財力としての會……四〇
——(41)普遍的潛勢力——(42)日本の無盡講との差異——
第八節　支那の社會……四二
第七款　社會層の種別……四二
——(43)分類標準としての力——(44)權力手段階級——(45)金力手段階級——(46)他力手段階級——(47)遊民の多き原因——
第八款　支那社會の特質……四五

——(48)流通性多き社會層——(49)中產階級に對する誤解——(50)大金持の出來ぬ支那——
第五章　支那人及支那社會の種々相……五〇
第九節　個人信用の尊重……五〇
——(51)個人が政府を保證——(52)生存の爲めの個人信用——(53)錢莊の威力——
第十節　利害に明き支那人……五二
——(54)計數本位——(55)支那人の買物振り——(56)面子問題——(57)勞働者に對する誤解——(58)銀行券の取付——
第十一節　實際的な支那宗教……五六
——(59)殆んど形もない儒教——(60)道教化した佛教——(61)現世本位の道教——(62)利用さるゝ基督教——
第十二節　實質本位の支那食……五九
——(63)世界一の經濟食——(64)朝食の種類——(65)勞働者の食費——(66)日支料理屋の對比描寫——

第十三節　政府を的にせぬ支那人　……六八
——(67)華僑の發展——(68)刑事問題の個人間解決——(69)支那人の法律思想——
第十四節　無意識的な反資本家思想　……七〇
——(70)黄包車夫の階級心理——(71)社會政策的な質屋——(72)下層階級本位の小賣値——
第四編　餘　論　……七四
第六章　支那の新傾向の解　……七四
——(73)支那の理想論と民衆——(74)煽動者の數——
第七章　支那人及支那社會の將來　……七五
——(75)日本留學生の變化傾向——(76)何處までも支那社會——

序

支那は謎の國である、スヒンクスが出した謎以上の、支那は勿論、世界各國の學者も逃げ出したこの世界無比の謎に盲蛇的に直面する男があるから不思議でなければならぬ、といふのは或る性格破産者の一青年が、日本の支那學者窘めで有名な、學者ならぬ學者の斷片的講話を三四回聞いて居る間に、かけられたかまとは知らず、何んだかこの謎が解けそうだといふ馬鹿げた謀反氣を起して手をつけたのが抑の間違ひだつた、ニュートンが何か新發見をした學者は小供が大海の前で、綺麗な小石を振つて喜んで居る樣なもので、眞理の大海は際涯なく眼前に横つて居るといつた、その男も最初二色の美しい小石を搜し出して喜んで居つたが、またもう少し大きい石を得た、これを繰返す事三度、ふと支那といふ大海を眺めた時、棘然

として自分が今スヒンクスの前に立つて居る事に氣がつき、その小石をなげつけてにげ去つた、その男とは即ち著者で、その小石は本書、また學者ならぬ學者とは內山完造先生である、知らずその小石は從來の研究と五十歩百歩なりやを。

昭和六年二月十九日父を焙きし日

著者識

凡例

一、支那は面積四百方哩、人口四億の大國である、この大國を一元的に論斷せんとするのは始めから無理な話といはねばならぬ、李初梨氏が、中國は如何に惡口をいつてもいひ足らぬ、これと同時に如何に褒めても褒め足らぬといつたのは至言で、それほどに支那は廣大である、そこで著者は支那五族（漢族、滿洲族、西藏族、蒙古族及び回族）中絕對過半數を占むる漢民族についてのみ論する。

一、著者は正味一ヶ月、半本書の前に公刊した「支那の無盡に關する研究」の執筆に從事すると共に、著者の所謂內山學院たる內山完造先生その許へ通つて、四遍目の支那であるが、更めて支那の事情を殆んどＡＢＣから敎へて戴いた、この通學と讀書と思索とによつて出來た此の小著中に若し見るべき所がありとすれば一に內山先生の賜であり、若し間違つて居るとすれば全部著者の罪である、但し見方や結論は兎も角、例に擧げた材料だけはチランポランでない事實

である事は保證する、玆に謹んで同先生に深厚の謝意を表すると共に本書成立の由來を述べる

一、本書の特長は內山完造先生の在支十七年間の研究的體驗と、魯迅先生始め二十人以上を算する日支の職業的ならぬ學者諸氏の高見と、著者の乏しき體驗とを綜合して、池田式體系と理論とを作つた事にある、その意味に於て、通り一遍の視察記或は机上の空論と自ら選を異にして居る事を斷言する。

一、從來の日本人の支那觀と著者の見界と全然異る重なる點は

(1) 支那人及び支那社會の研究に體系を立て科學的討究をなしたる事

(2) 支那人性を計劃的本能主義と斷定したる事

(3) 帮の精神とその具體化したる各種帮との關係を甄明したる事

(4) 帮と會とを支那人性の具體象としてその區別に集合力なる說明をなしたる事

(5) 支那の社會層に新しき種別を試みたる事

一、著者の處女作無盡の實際と學說を公表した折三浦周行博士は無盡を論じた人で著者の爲めに多少の手傷を負はせられぬものはないと史林で批評されたが、本書に於ても隨分と八當りして

居る、然し著者は必ずしも人を攻擊して自ら快とするものではない、要は公開狀として出した以上必ずや何れかの方法によつて反駁あるものと信じ、これによつて著者の研究を更に進め、この大事業の完成に近かんとする微意に過ぎない、こゝに特に本書に於て論難した諸士の芳名とその著書及び論文名と、これを引用した本書の頁數とを擧げて垂敎を乞ふ次第である。

(1) 平田良衛氏　支那革命と農業問題　思想特輯支那號　(五——六)

(2) 伊藤武雄氏　現代支那社會研究　(六)

(3) 小竹文夫氏　支那の社會と政治　上海週報　第八百十七號　(一一——一二)　(四四)

(4) 同氏　自然環境と支那社會　支那研究　第二十號　(四四——四五)

(5) 清水董三氏　新支那の斷面(一五)(五三)　(五三——五四)

(6) 長野朗氏　支那の社會組織　(一四)　(一五)　(四四——四五)

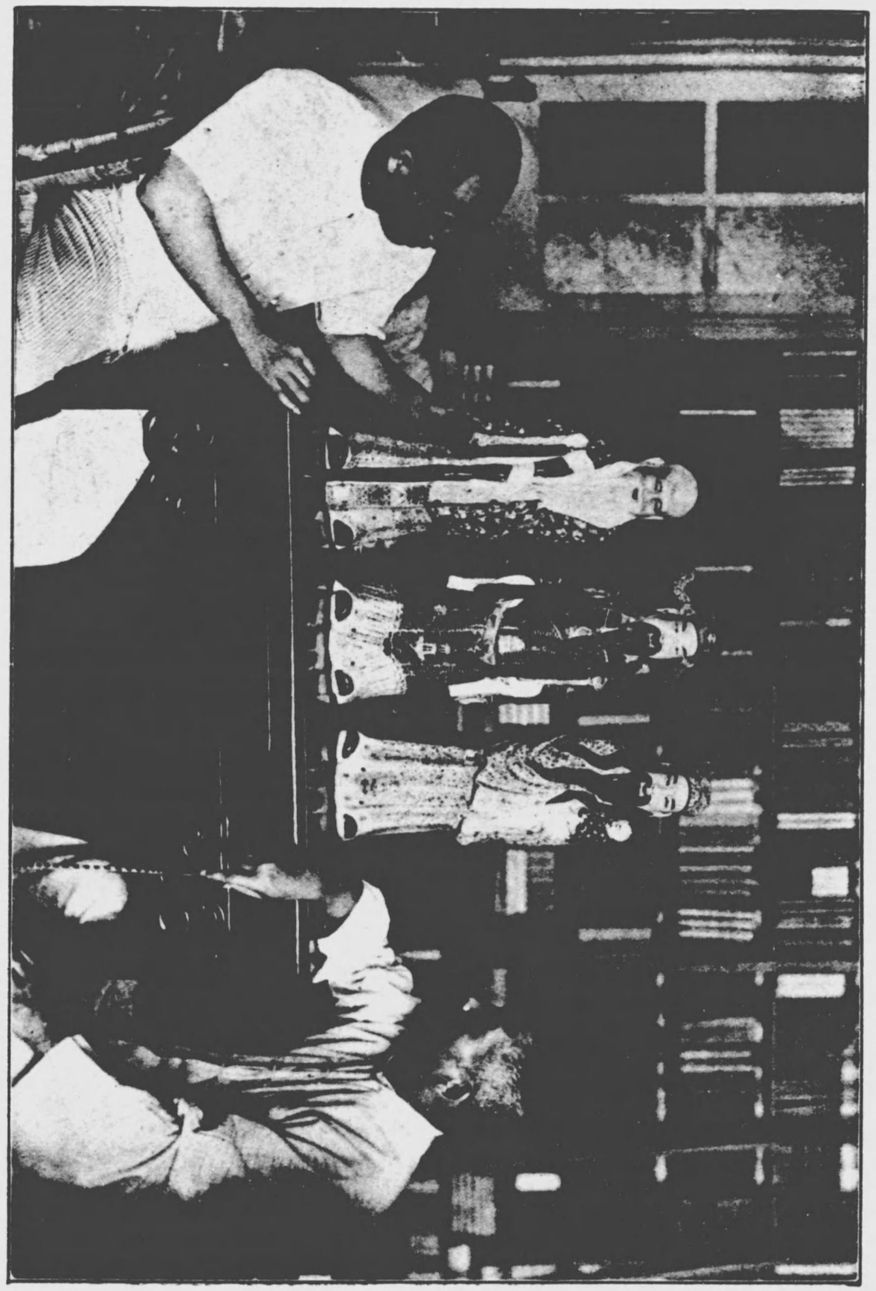
(7) 同氏　支那讀本　(四一)　(四四)

(8) 井上翠氏　井上支那辭典　(一六)

(9) 西島良爾氏　新編支那語敎程　(一七)

(10) 久重福三郎氏　支那貨幣に就きて　(一三)　(七〇)
(11) 西川喜一氏　支那經濟總覽　第二卷　(二三——二四)
(12) 村松梢風氏　支那漫談　(二八)　(五四——五五)　(六九)
(13) 大谷孝太郎氏　上海に於ける同鄕團體及同業團體　(三七——三八)
(14) 後藤朝太郎氏　お隣の支那　(四七)
(15) 井上紅梅氏　麻雀の取方　(五二)
(16) 和辻哲郎氏　支那人の特性　思想特輯支那號　(五五)

一、本書は一昨年支那から歸朝した後に「支那の無盡に關する研究」と共に公刊する豫定であつたが、或る書肆に相談した所「テーマとしてば面白いと思ひますが何分ジャーナリズムの尖端を行く本社としては……」といはれたので「天下の池田が散々苦心して書いたものをこんな若藏に批判されてたまるもんか」と池田式を發揮してそのまゝにして置いたものを今回父の死に會ひ、溫厚なりし父には不似合な本ではあるが、その紀念として出版した次第である。



內山先生福祿壽の說講義の圖

內山先生「第三の壽は人の本能である色食の二つを綜合した生存を希ふ處から來て居ると獨斷したのです」

著者「つまり福祿を揮然一體した支那の不老不死ですネ、不老は性慾（種族保存本能）、長生は自己保存本能（食慾）と解釋すると、先生の福祿壽の說と僕の支那人の計畫的本能主義とはぴつたり合ふぢやなりませんか」

第二圖

支那朝食第二回試食會の圖

赤色日の八月一日は工務局や日本の新聞は氣狂ひ沙汰に騷いで居つたが著者は聊か所見を異にしたので、租界境界線の狄思威路を悠々徒歩で午前六時過ぎ内山書店に向つた、内山先生が著者の爲めに態々催して呉れた支那に於ける中下層階級の朝食の第二回試食會に出席せんが爲めである。机の上向つて左より茶碗三つに原稿、前方の丸いのは肉包子、後方は酒娘餅(左)と豆沙饅頭(右)の積み重ねと猪油餅、前方の黑長く見ゆるは油條、後方の白く丸きは煮飯、茶碗三つ試食前内山先生が著者の原稿を讀みつゝこれを中心に皆にて議論して居る所。

支那人及支那社會の研究

池田龍藏著

第一編　緒論

第一章　支那研究の方針

先入主は禁物

最近日本の支邦研究者の殆んど全部が上海に來た場合一度以上は必ず訪問して支那事情の敎えを乞ふ所少くともきつと一度は通る關門としての支那視察研究者に對する上海の稅關がある、北

四川路底内山書店がこの稅關の建物で、烏起山先生（内山完造氏）が稅關長である、この内山先生に日本の支那視察者の傾向はときくと「前には日本にある材料で大體支那に對する結論を作つて來、後はこれをアフアーム？　する爲めに一通り視察をするといふ具合でしたが、近來はそうした先入主を持たずに支那は不可解の國だとの疑念を抱いて渡支する方が多い樣です」との事、餘りに後きの觀あるが、此の傾向は誠に慶賀に堪えぬ、一體科學的研究は公平無私でなければならぬ、その意味に於て例へば高橋龜吉氏が日本の經濟狀態を非常に精密に調査し、またこれに對して獨特の見解を下す事には非常に敬服して居る、然し割合に主義者的宣傳に墮せぬ同氏にして尙且つ日本の資本主義經濟組織は必ず崩壞するものと高橋氏がマルクス流に作つた前提を動かすべからざることにきめて、それから材料を蒐集整理する嫌があるが、こうしたことには學徒として何うしても贊成出來ぬ。

白紙主義

主義的或は政治的宣傳者なら兎も角、苟も社會科學學徒たる以上、飽まで白紙主義たる事を必須條件とする、支那人及び支那社會を研究するのもまた然りで、先づ第一に今までの日本人式支那觀に一切囚はれず、全然机上の空論たる支那管見を眼中に置かず、自分でやり直す氣で、更に進んで自分が日本人たる事さへ忘れなければならぬ、いよ〳〵支那人及び支那社會の眞相を摑んだら、これを日本人として批評し、或は日本人として實行し得る點を日本の政策に移すのは當然の事であるが、視察研究前は勿論、結論に到達するまでは何處までも、日本人でもない、冷靜なる第三者としての態度が緊要である、大體日本人は多く支那人を惡く惡くと解釋したがるが、また一部には無理に支那人を善く解釋しやうとあせる人もある、こうした事は科學者としては最も忌むべき事で、飽まで白紙主義でなければならぬ。

第二章　實地研究の要

官半官賴りの視察者

支那研究の態度或は方針は以上の如くなりとし、そんならこうした主義の下に何ういふ方面を研究すべきかといふに日本の今迄の視察研究者は公使館、總領事館、領事館、公使館付財務官事務所、商務參事官室、滿鐵調査課、在留日本人商工會議所、横濱正金銀行及び三井物産の支店な

ど計り訪問して、そこの幹部の通り一遍の御談議に滿足し、もつと名士になると公使館、總領事館、領事館、日本人倶樂部或は日本料亭に於ける官吏、在留日本人の有力者或は在華日本紡績同業會等の歡迎會席上の挨拶に滿足し、印刷した資料だけを買つて來、あとは日本人の耳になれて居る名所舊跡を遊山して、歸朝すると、やれ支那は何うだの、支那人はこうだのと御託をならべるんだから凄い、七月八日の上海毎日(昭和四年)を見ると、大臣待遇の親父と徹頭徹尾公式旅行をして、餘り文藝に緣のない中華民國の要人連と日本の外交官や在留の日本人有力者に會つただけの內地の某文士が、支那には文士が見當らないと仰つて居るのと似たりよつたりだ。

カント式では駄目

こうした調子では何時になつても支那の眞相に近づく事が出來ず、日本人式の支那觀、机上空論式の支那觀に過ぎないのは當然である。こんな視察旅行のやり方は必ずしも支那に限つた譯でなく、歐米などに於ても著者はよく苦々しい所を見せられたが、兎に角外國の視察研究は飽まで實地調査を主としなければならぬ、特に支那の如く誤解され易すい所では今迄の印刷物のみによる事は禁物である、奈翁が戰勝の祕訣は一にも金、二にも金、三にも金といつたのと同じく、支那研究は一にも實地調査、二にも實地調査、三にも實地調査といつても大した差支がない、前述の日本式視察者法でなくとも、矢鱈に書籍だけによるのも頗る危險だ、兎に角支那研究は哲學でない以上、自國の戰亂も知らずして書齊に閉籠つて讀書と瞑想に耽つたカント式では駄目である

飜譯は危險

特に風俗習慣の互に異る三ヶ國があつ、乙國人が甲國の研究論文を發表し丙國人がこれを飜譯するには危險が伴ふ、支那の例でいふと歐米人の支那研究書だけに賴るが二重の誤解をする惧がある、卽ち歐米人が歐米人式に解釋し、これを日本人が假令誤譯しなくとも日本人式に解釋するから二重の誤解を重ねる事になる、例へば支那の幇を英米人の間似してギルトなどといふ字を使ふから間違いの基となるのだ、特にひどいのは支那の事などは歐米人の本の上でしか知らなかつたマルクスまで引張り出して「マルクス及びエンゲルスは支那の正常ならざる社會制度を指して封建的とはいはずに「アジア的生產方法」といつてゐる、此の「アジア的生產方法」なるものは本質的には封建的搾取關係に立つものであるが、ヨーツパの封建制度とは多少違つた性質を有するものである。」(平田良衛氏、支那革命と農業問題、思想特輯支那號七二頁——七三頁)といひ

それだけで足りなくて更に封建的だの半封建的だのといふ字を使つて居る、こうなると封建制度に對して郡縣制度なる言葉がある事を知つて居るのか、支那では秦以來漢の郡縣制度以外封建制度を何處に見出す事が出來るか、はたまた搾取上何れの制度がひどいかまるで御存じないのでなからうかと疑ひたくなる、尤も民國以後の督軍督辨の如きは幾分封建的であり、また農民搾取の意味に於て半封建といつたにしろ、何もミフや中國共當黨の間似をせずともよさそうなものである

また伊藤武雄氏の如きもその著「現代支那社會研究」に於てやたらに「時京政府と封建社會」「清朝滅後の封建分裂」（三三六頁）「北洋軍閥の……封建政治」「支那の封建性」（三三八頁）などと封建なる言葉を振廻して居るが、これまた支那の眞相を誤解して居る實例といへやう、尤も此の封建なる言葉は以上の諸氏のみならず、田中忠夫氏を初め多くの支那研究者の好んで使用する所で、著者のその意を解するに苦む所である。

視察者の要訣

視察者がその國に關する印刷物を精査するの必要あるは今更喞々を要せぬ所であるが、たゞこれに囚はれては駄目だ、何處までも參考とするに過ぎぬ事を牢記しなければならぬ、然し眼目は

實地調査である、所が支那は四百餘萬方哩の大國であり、且つ一般の視察者にも金か時間かの關係でそう悠々調査が出來るものではない、但し視察時間が短かいから必ずしも研究が不可能とは斷言も出來ぬ、余の經驗でも、今まで主として經濟論乍ら、十ケ國以上の視察をなし、極端な所になると歐洲邊では一國を四日位しか見ないで書き上げ新聞にも出せば、本にもし、また苟も一國の經濟論をする以上、それが基本をなすその國の國民性をも研究し、米國等に對しては余の獨特の解辭を下して公にしたが、今日に至つても、まだそう間違つた結論をした事はないと信じて居る、それには種々方法もあるが、第一はその土地に長く在住した權威者に心を空ふして敎を乞ふ事だ、問ふは一時の恥問はぬは一代の恥、といふ事もある、何うせ視察者なんだから、出來るだけ聞くに限る、（尤も余が支那の問題を研究するについて殆んど一から十まで內山完造先生に根堀り葉堀りしたのでは一時の恥でなく、一代の恥かも知れぬ、）然しこの權威者といひ居る人も餘り多くはないもので、長い在留者ほど神經衰弱になり、一寸も滿足な返答をして呉れぬ人が多いからいやになる、だが各地に二三人を權威者は必ずあるもので、朝鮮に於ける小野久太郎氏の如きもその一例である。

呆れた外務省官吏

成程故郷を離れて長く海外に滞在すれば、望郷の念に惱されもするだらうし、永年在住すればその國に對する刺戟も少くなるだらうから、移植民には餘り適せぬ日本人として深く責むるのは無理かも知れぬが、こゝに看過出來ぬのに外務省關係の海外駐在者がある、彼等は多く佛蘭西語使ひ英語使ひを以つて滿足し、殆んどその駐在國の國情特に經濟事情を知らぬ、例へば著者が歐洲各國を二回視察した折、著者に對してその國の經濟事情について相當な解答をして呆れた人は當時の安達白耳義駐在大使と岸アントワープ領事等の四五人あるのみだつた、特にひどかつたのは堂々と法學博士の肩書を振り廻す公使で暫く話して別れて見ると結局獵の話だけが頭に殘つたのみなんだから大したものである、元來日本の領事などは自分を外交官なりと誤信して、てんで本職の事を知らぬのを却つて得意として居る人が多いから始末におへない。

第三章　支那研究に關する注意

第一節　支那の地理

廣漠たる支那

以上は必ずしも支那研究だけの注意でなく、萬國の場合に通ずる原則であるが、玆に支那研究に際して特に日本人の注意すべきものがある、その中第一は支那の地理である、こんな事をいつたら誰でも苟も支那を研究する以上一通り支那の地理位知らんで何うするかといふだらうが、たゞ知つて居つただけではいかぬ、始終これを頭に入れて置く必要がある、日本人は假令支那の地理を知つて居つても兎角猫額大の日本式に支那の事を解釋するから間違ふのだ、支那の地理で最も注意すべきは支那の廣さで、支那全土の四百萬方哩は兎も角、漢人種の支那本部十八省の面積だけでも日本帝國の六倍强、本土の十七倍、四川一省が日本に相當する事を忘れてはならぬ。

日本人式の解釋

所が日本人は何うも日本を土臺として支那を考へたがる　例へば中央政府が排日中止の命令を下しても中々地方が鎭まらぬと直ぐ政府が誠意なしと攻擊する、成程そうした場合もあらうが、とたひ誠意があるにしても巨離と交通機關との關係上そう日本式にはいかぬのだ、或る有名な民國の學者に日淸戰爭に關する感想をたゝくと、ありや滿人の役人と日本との戰爭で、我々漢民族

には關係のない事ですと涼しい顔をして居る、これなども日本人では到底理解出來ぬ所で、これまた支那が如何に廣漠たる國であるかの傍證である、されば如何に中央當局が犧牲を拂ふとも國語の統一幣制改革等は近き將來は先づ不可能と見るのが至當で、これを日本式に解釋すると間違ふのだ。

第二節　文字通りの特種國支那

國民經濟なき支那

前節の如き支那であるから例へば蒙古地方では牧當經濟時代であり、中南支地方では農業經濟時代を見られるが、上海や漢口では工業經濟時代を現出して居るといふ次第である、そこで某教授の如く支那の國民經濟は自然經濟であるといふに至つては反駁する氣にもなれぬが、新しい連中はよく支那ではまだ國民經濟が成立して居らぬといふ、然し以上の如き支那に歐洲學者のいふ國民經濟が成立する譯がないのだ、これは地理的實況より論斷したのであるが、理論上からいつても歐洲式國家なき支那に國民經濟が出來上ると思ふのが間違ひである。

歐米社會學は不適用

されば歐米に發達した白人の國民經濟を基調とした國民經濟學は支那には應用出來ぬ、一つの參考に過ぎぬといふ事になる、然らば歐米の社會學は何うであるかといふに、これまた主として歐米の社會を基礎とした歐米の社會學は支那には適用出來ない、換言すれば歐米の社會は國家あつての社會、白人の社會であるが、支那の社會は嚴密な意味での國家なき、否それと離れた社會であり、支那人の社會であるからである、この意味に於て支那を研究するのに歐米の社會學や國民經濟學に囚はれてならない、要するに參考に過ぎぬ事を牢記しなければならぬ。

支那の極貧者問題

そこで以上の事を實例を擧げて說明するに、こゝに支那人の經濟生活がある、日本の支那研究者がよく誤解するとは反對に支那に、中產階級のある事は第八款に於て、勞働者必ずしも無產階級でない事は第十節に於て說明ずるからこゝでは日本の支那研究者がよくいふ極貧者の事を述べやう、例へば小竹文夫氏は「支那の社會と政治」と題する論文に於て「恒產ある者と雖もこれも外國に比せば矢張極貧階級に過ぎぬ」、（上海週報第八百十七號一六頁）といつて居るのは實に奇

妙な言葉で、著者の如き頭の惡いものには解せぬ、假りに支那に於て恒産ありと稱せらるゝものも外國では極貧階級であるといふ意味であれば、その外國とに何處であるか、以上の言葉の次に直ぐ「又支那の大資産家と雖も之を西洋や日本の大資産家に比しては又貧乏人に過ぎぬ(同上一六頁――一七頁)といつて居る所から見ると歐米及び日本の意味らしいが、小竹氏は果して日本や歐米の極貧階級を實際について調査された結論であらうが、尤も廣い支那であるから極貧人も居り、また支那に大金持の出來ぬのは第八款にて說明する通りであるが、小竹氏が想像する樣なものでない、また第十二節でものべる樣に小竹氏が所謂極貧階級の食物も果して小竹氏が實際に食つた結論であるが甚だ疑なき能はずである、最後に小竹氏は「草根木皮を常食にして居る所も多い」(同上一六頁)といふが、これは人口過剩の結果でなく、その邊は未だ原始生活をして居るから に過ぎない、以上の如く支那の研究には歐米の經濟學及び社會學をそのまゝ適用してはならぬ事が第二の注意である。

第三節　支那の通貨

通貨は貨幣プラス物

日本人の支那研究につき特に注意すべき第三の點は支那の通貨が日本のと全然違ふ事である、卽ち日本銀行の紙幣は事實上餘り兌換せざるに拘らず、準備金を信用し、また補助貨は政府の保證により絕對安全なるものとして疑はず、また日本ではこれが當然であるが、支那に於ては通貨は貨幣プラス物に過ぎない、だから銅貨を北支那では銅子兒(トンヅル銅の兒)、中部支那では銅角子(トンコツ銅の片)南部支那では銅板(ドンペイ銅の板)といふのである、然るに久重福三郎氏邊でさへ「支那人は凡て補助貨なる者に對する觀念に乏しく」(「支那貨幣に就きて」六頁)といつて居るが、支那人には補助貨なる觀念は乏しい所が全然ないのだ。

支那人の通貨觀念

こうした譯であるから、支那を研究するのに日本人の如き貨幣觀念を捨てなければならぬ、支那では通貨は日本のと全く違ふ事を銘記するの要がある、支那で贋銀貨が割引して使用される事などは日本人としては、理解に苦しむ所であるが、支那の通貨＝貨幣十物なる觀念から見れば何んでもない事である、この支那人の通貨觀念こそは支那を研究する場合に最も注意しなければなら

ぬ所で、日本の所謂支那通であつて此の點を知悉せぬ嫌がある、例へば長野朗氏などが「その貨幣制度が不統一で、人民はどれだけ困つて居るか知れない（同氏著支那讀本一一三頁）といふが、これは盾の半面で、これだから商賈人に商賈以外の甘味がある事を看過して居る。

通貨觀念相違の誤解

こうした通貨觀念の極端な相違からして日本人はよく支那人を誤解する、例へば日本の夫人連が餘り言葉の解らぬ所からうるさいと思つて車を下りた場合銀貨を車夫の手に投げ出して逃げるので、おつかけられる事がある、たまには惡い車夫もあるが、大體は車夫の方で相當の金を貰つたのに大急ぎで逃る所を見ると賃金でないかと誤解するので、著者は金を渡して悠々去つた場合と、急いだ場合と大部車夫の調子が違ふ事を體驗上知つて居る。

第四節　支那文の正讀

漢籍より離脱

第四には文字上特に日本人が注意すべきものがあるといふのは日本人が漢文を知つて居るといふハンデキャツプならぬハンデキャツプである、これは一見危辯に似て居るが、第一日本人は漢文を學ばされる結果、漢籍通り現在の支那を解釋せんとずる、例へば支那を大家族制度なりと誤解するが如きもこれに原因する事で、成程支那の家族は日本人特に歐米人の家族より人數多いが、決して大家族制度でない、また一族中に成功したものがあると親族の厄介者が多くなるが、これは大家族制度といふ譯にゆかぬ、所が漢籍を通して支那の宗法などの內容を見ると如何にも大家族制度の樣に思はれるが、あれは分れた同族を結び付けんとしたものである、清水董三氏などは「九世同居」なる言葉を以つて支那の大家族制度の說明をして居るが、（同氏著新支那の斷面七四頁）恐らく宋史孝友傳に出て居る張公藝の「九世同堂」の事を指したものらしく、これは支那で非常に珍らしいとて特筆大書された例外に過ぎない、長野朗氏も矢張これに囚はれて後漢書など引合に出して居るが、（同氏著支那の社會組織四頁）これまた同樣で、假令支那人がこれを本に書いた所が、これで支那のマスに大家族制があると斷定出來ぬ、こうした具合に漢籍に囚はれる日本人は非常に多く、その爲めに支那人を誤解する事になる、莊子の言草でないが書不過語である

第二に日本人は漢文即ち支那の古文を讀めるので便利であるたけに、現在の時文や白話文を讀む時にこれが可成妨害をなす、もつと詳しくいへばなまじつか漢文を知つて居るだけに支那の時文と白話文を讀む時に誤解し易いといふのた、この點は日本の支那語の專門學者も氣がつかぬ位で、現在支那流行のポスターや傳單の支那語が日本で誤譯されて大騷される理由もこゝにある、これをもつと具體的にいへば、日本式に考へられて居る漢字と、これと同文字の時文及び白話文とには非常に差がある場合が多い、例へば力爭といふ字についていふと、日本では隨分强い意味であるが、支那では極く輕い文字で、しつかりやる位の所である、所が手近にある井上翠氏の井上支那語辭典などを見ると矢張「アクマデ爭フ」とあるが、これも日本人式解釋だ、また著者が翻譯した「中國之合會」(「支那の無盡に關する研究)」などに例へば莫大、巨額、靈敏、絕技等の字が出て來るが、これを日本式に譯したらまるで滑稽な事になる、それから永遠といふ字は何時でもといふ意味に過ぎない、告訴とは單に告げる位の所である、壓迫や、要求や或は奇怪なども同樣極く輕い氣持で使つて居る、以上は同一語が現在日本で支那より餘程强い意味に用ひて居る具體的說明であるが、その他例へば嗔嘩の如きは日本では毆り合つても、とつ組み合ふに至つ

ても嗔嘩であるが、支那では口で罵り合つて居る間が嗔嘩で、腕力沙汰になれば打架といふ、かくの如く日本では一語で支那の二つの意味を兼ねて居るのもある、尙吵鬧はまだ嗔嘩にも至らぬものである、所が西島良爾氏の新編支那語教程には叩き合ひをする意でないとある所はいゝが我が國の嗔嘩する意であるとしてゐる(同書一一八頁)また文句にしても、床屋の表に「諸君欲進堂請廻後門」などと、日本人から見ると麗々しく書いた紅い紙が貼つてあるのを日本式に讀むと非常に四角張つて聞えるが、支那では單に「御用の方は裏から」といふに過ぎない、これを最も端的に物語つて居るのは支那の里數である、假定それは日本の里數の六分の一だと知つて居る人でも、卒然として長江萬里などといはれると、また例の白髮三千丈式かと誤解する事がある、だから內山完造先生が漢文六分說を如何に高調されても案外反響がないのも別に不思議はない。

使用文字の間違ひ

以上は程度の問題であるが、今度は日本と全然違ふ文字がある、これは日本に輸入された當時誤解したものか何うか猶考證を要するが、兎に角現在は全部違ふから注意を要する、例へば蒲團は支那では日本の神官などが座る圓座に相當するもので、日本の蒲團は被褥、被褥、鋪蓋或は被

套である、餅は支那では第十二節で說明する樣に燒いたもので、日本の餅は當るものは糕と稱へる、餛飩は支那ではわんたん卽ちメリケン粉の皮で肉の細かに切つたものを包んたもので、日本のうどんに相當して居るのは麵である、茶碗は支那では茶を呑むものだけで(口繪第二圖參照)飯を食べるのは飯碗といふ、疊は支那にはないが、これは動詞で物をたゝむ意に過ぎない。

松江之鱸と解放

特に面白いのは赤壁賦にある「巨口細鱗狀如松江之鱸」の句、と雲州松江の鱸で、日本の人口に膾炙する鱸である、鱸の方は一度ブックレビュウかに出た事があるそうであるが、一般には知られて居らぬから更めて紹介する、此の松江(ソンキャン)の鱸は日本ではすゞきと訓し、雲州松江の日本のすゞきにもこの鱸の字を使つて居る、所が支那の鱸は日本のすゞきでなく、沙魚卽ちはぜである、これは日本で櫨の字をはぜの木と讀むのがその傍證になる、それはともあれ實物は最も雄辯、松江の鱸は赤壁の賦の通り巨口細鱗で、まさしく日本のはぜに相違ない、この松江之鱸が名物なる所以はその味の淡白なると共に、腮が朱色の四段になつて居る事で、爲めに四腮鱸(ススル)と稱されて居る、著者はその發見者の內山先生に敬意を表すると共に、日本の漢學者に特に注意を促し度い、次は解放である、これは松江之鱸の樣な間違ひでないが、こんなにまで違つた意味にも使はれるかと呆れる例に過ぎない、多分日本からの逆輸入語だと思はれるが、一般には日本と同樣に使はれて居る、所が北平などでは小便をする意味にもなるんだから餘程氣をつけなければならぬ、また東西は東西何里などの意には時文に使はれるが、白話文では品物で、日本式の東西といふ時には東方西方である。

第二編　本　論

第四章　支那人の本體

等五節　支那人の社會人性

第一款　國民性なき支那人

國民性の研究

以上の用意の下に支那人なるものを研究し、支那社會なるものを討檢して見ると、第一にぶつかる問題は支那人は果して國民性を持つて居るかといふ事である、仰も一民族或は數民族が獨立國たると非獨立國たるとを問はず、一國家を形成して居る以上、そこにその國家を基本とした國民共通の特性たる國民性を有して居るのを普通とする、詳言すれば數民族が渾然として一國民性

をなす場合と、一國家内の多數民族がその國民性をなす場合と、或はその中間を行く場合と種々厚薄明瞭の別はあるにせよ、大體國民性を持つて居るものであるが、支那人にはこの國民性と認むべきものがない、假令支那四億の中絶對多數を占むる漢民族及び殆んど漢人化した大部分の滿人だけについていつても中華民國々民性と稱すべきものが見當らぬ、これは世界に於て全く類例の見ない所で、國民性研究の特例をなすものである、然るに日本の支那研究者は何れも支那人の國民性といつて居るが、用語上の問題であるにしろ全然讃成出來ない、要するに支那人、もつと小さくいつて漢民族には國民性がないのだ、そんなら何があるかといへば、新語ではあるが社會人性を持つて居るのみといふ外ない、詳言すれば假令支那には中央政府があつても、その國家を基本とした共通の特性たる國民性がない、たゞ支那の漢人種の對社會の共通の特性たる社會人性（社會成員性）あるのみだ、一體日本人は極端に型にはまつた國民性を持つて居る國民であり、米國人の如きは今日盛に國民性を作りつゝある國民であり、支那人は全然國民性のない社會人である、一體支那人を國民といふのが間違の認めで、支那人は社會人といふ外ない、こうした人々に國民性を云々するのは無理な話ではないか、兎角日本人は直ぐ日本人式に外國人を律しやうと

するから困る、この支那人に國民性なく、社會人性のみが發達して居る所に支那人としての特徴がある、これと反對に日本人には國民性はあつても社會人性が殆んどないんだから、一般の日本人は支那人を了解するに苦むのである。

日支人の個性の行方

以上の如く支那人は對社會の社會人性を持つて居るが、そんなら支那人の個性は如何といふに第四款に於て論ずる如く支那人は飽迄自己本位であるから、社會なるグループに入つても決して個性を沒却しない、所が日本人は個性は中々強いが、國家の中に入ると個性を沒却して終ふ、これ即ち大和魂の特長で、國民として最も力強い所以である、それと反對に日本人は社會には決して個性を沒却させぬ、これ即ち著者が日本人には國民性はあるが社會人性がないと斷言した所以である、支那人は個性を國家に沒却させる事は絶對にない、また社會人性はあり乍ら個性を社會にも沒却させぬ、これまた社會を基本としたといはず對社會の社會人性といひ、また支那人の獨特の社會人性があるといつた理由である。

徹底せぬ支那人觀

そこで支那人の社會人性の說明であるが、日本人はよく支那人は個人主義に徹底して居るといふ、成程支那人はよく「各人自掃門前雪　莫管他人瓦上霜」といふ通り確に個人主義的の所があるから、著者も決してこれを否定しない、たゞ支那人の社會人性を說明するに個人主義では足らぬ、一體個人主義といふ言葉が甚だ不明瞭なテキニックで、千差萬別あり、一般には政府あつての個人の自由主義ととられ易い、尤もブルドーンなどの社會的個人主義はまた別であるが、何れにしても在來の個人主義では支那の社會人性の屬性を十分說明するに足らない、次に支那人は無政府主義者だといふ、これも個人主義的と同樣、著者は否決はしないが、矢張支那人の社會人性を徹底的に說明するには不十分であると斷ずる、成程マスとしての支那人は政府を極端に嫌ふ政府は人民を保護するものでなく搾取機關であると思ひ込んで居る、だから支那人は役人の前に出ると平氣で嘘をつくが、こうした事が日本人には了解出來ぬのだ、歐州に於ける無政府主義と發足點に於ては全然異るが、結果としては大體似通つて居る、然しこれは單に第十二節に說明する支那人の社會人性の一相で、支那人の社會人性の本源をついたものではない、以上は割合に正鵠に近い說であるが、その他例へば西川喜一氏の「余輩をして斯く迄絶望的筆誅を敢てせしむる

に到れるは抑も何に基因する乎、そはアーサー　スミス氏の言ふ如く支那人の有する普遍的性格と良心の缺乏に歸せざるを得ない」（支那經濟總攬第二卷第二〇四頁）の如き種々雜多な迷論がある、しかし何れも支那人をマスとして見ず、或は支那人として九牛の一毛にも足らぬ大官要人を通じ、或は寄生階級の一部を通じて支那人を誤解し、或は全然支那人を曲解したもので、今更反駁を加へるのも大人氣ない位である。

第二款　支那人本能の特質

支那人の基調は特種本能

果して然らば支那人の社會人性の實相は如何といふに、著者は計劃的本能主義と名付ける、この語は著者の新造語で、甚だ理解し難い嫌ひがあるから、如何なる事を意味するかを順次説明しやう、一體日本及び諸外國の支那通なるものは前章にて一言したに通りで、これを譬ふれば表面の波ばかりを見て、何うもそのアンダーカレントを極めない、流れであるから河床、風或は水量等によつて種々の波が立つ、だから或る人はその一波を説明し、また或る人はその數波を何等統一なく叙述する、然しその波の下には常に一定した底流がある、先づ第一にこの基調を捕捉しなければ支那人の社會人性の種々相を理解する事は木に椽つて魚を求むる類といはなければならぬこの支那のアンダーカレントは著者の見る所では特種の形式を備へた本能である、本能は動物につきもので、また白人にも日本人でも持つて居るが、支那人のは特殊の形式を備へて居るから、著者は計劃的本能主義と斷ずる。

本能表現の特異性

そんなら特殊の形式を備へた、即ち支那人本能とは何んぞやといふに、説明の便宜上これを蠻人白人及び日本人との場合を見る、蠻人の本能表現が原始的なるは論ない、白人は文化が進んで居る割合にその本能表現が單純である、公衆の前でキッスするが如きはその適證であらう、日本人の本能表現は純化されて居る、だから茶道の眞諦などは日本人でなければ解らぬ、これが日本人の誇りであると同時に、他民族との競爭上弱點となる、（白人と日本人との比較の詳論は拙著「經濟的亡國の危機」及び拙論「米國々民性側面觀」（女性改造所載）に詳しい、）然るに支那人の本能表現は全然前述の三者に異る、これ外人の支那人を理解し難い所以である。

計畫的本能主義の意義

そんなら支那人の本能表現は何うであるかといふに、元來原始本能は歐米の心理學によれば無意識的であるのに、支那人のは割合に意識的であり、一時的でなければならぬのに、支那人のは永續的であり、單純な筈だのに支那人のは復雜化して居る、だから支那人の本能表現は飽迄意識的で、永續的でその上復雜化して居るといふのである、この三つを要約するものは計畫的といふ外ないので、著者は支那人の社會人性は計畫的本能主義と獨斷した、たゞこうなると歐米式心理學上、本能といふ字が不適當らしくなつて來るが、これは著者の如き外道學徒として不得已所である。

第三款　支那人本能の實體

自己及種族保存本能

支那人の本能の特質は以上の如く意識的、永續的、且つ複雜的、即ち計畫的であるが、その實體は如何といふに、支那人の本能とて本能なる以上、自己保存本能と、種族保存本能との二あるは論ない、たゞ以上の如き特性ある本能であるから、その二本能にもかゝる特性あるはまた吹々を要せぬ、これをもつと具體的にいへば、支那人式自己保存本能は第一に生命第一主義として現はれる、よく日本人が支那人は金の爲めには命を措まぬなどと解釋するのは全くの淺見流者である。

生命第一主義

然しこれは支那人の眞の生活を知らぬ旅行者的日本人の誤解である、支那人ほど生命を措むものはない、その證據には支那には心中といふものがない、日本の樣な殉教者は何處でも見出せぬではないか、(第十一節參照)支那人が綁票(誘拐)された時自分の財產の三分の一もなげ出すのは何の意か、五卅事件の時に支那人が浦東の渡しで時勢を慨して川に投じたといはれたのは、余りに亢奮して演說した結果、足を踏み外したのに過ぎない事を知らぬ日本人は禍なるかなである、詩經の明哲保身はよく支那人氣分を說明して居る、支那人は平和主義であることも孔子及び老子の影響でなく、支那人が平和主義なるが故にこの二つの思想が生れたので、要するに支那人の生命第一主義の現れに過ぎない、また莊子を見ると「以禮飯者始乎治常卒乎亂」とあるから、莊子時代の支那人は醉拂つたものか知らぬが、近來支那の途上で泥醉者を見る事出來ぬのも、老酒の樣

に直ぐさめる支那の酒の特質や、支那人の勘定高い事にもよるが、主なる原因は支那の如き無警察狀態では支那人として自己生命保護上當然の事であらう。

支那の匂ひ

村松梢風氏などにいはせると支那には「世界の何處でも味はふことの出來ない支那本來の匂ひ」(支那漫談三二頁)があるといふが、著者にいはせると、支那に限らず、何處の國でもその國獨特の匂ひがする、これは一番空氣の籠つて居る地下鐵道などでよく感ずる所で、著者が曾つて或る雜誌にも書いた通り紐育のアンダーグラウンドでは一寸でも默つて居られぬ樣な生々した若い人間の匂ひがし、倫敦のサブでは古くさいが何んとなく落付いた老人の匂ひがし、巴里のメトロでは何んとなく細かな、白粉くさい女性の匂ひがし、伯林のウンテルでは男の科學者を思はせる藥品の匂ひがする、支那には地下鐵道がないから、狹い路踏に行くと複雜なしつこい匂ひが人の鼻を打つ、所が日本の匂ひは一香あわい、この支那のしちつこい匂ひこそは支那人の生と性に對する執着を雄辯に語るものである。

沒有法子

然る一方支那人は至つて思ひ切りがよく、沒有法子の一語で大低の事は諦める、支那の民衆は論語の「死生有命富貴在天」などいふ古文を知らぬから「今年運氣不好」などといふが、この言葉もよく支那人の性格を表はして居る、前述の通り生命第一主義の支那人が諦めよいといふと如何にも一見矛盾して居る樣であるが、實はこれが、却つて自己保存上結局得策たのだ、といふのは政府の保護なく常に天災人禍にさらされて居る支那人にとつては早く諦めた方が寧ろ賢い道である、例へばうつかり債權問題で裁判所に訴へると、金のある方が理窟があつても馬鹿を見る事が多いから結局諦めた方が勝になる、そこで支那人は日本人の樣にあせらず、大陸人的に悠々として居る、同じ支那服を着つても扇子の動かし方でも日支人との區分がつく、また支那の田舍などに行くと目に一丁字なくして老子の無爲而無以爲の上德を自然に體得して人間が澤山ある。

性中心主義

支那人式本能主義はまた種族保存を基調として性中心主義として現はれる、第十二節にて論ずる支那食の如きは飽まで經濟的であると同時に、何處までも性慾亢進を基本としたものである、また性慾關係の賣藥の多き事も實に世界一であらう　阿片の如きも飽く事なき性慾の享樂と深き關

保を有する、孟子の「不孝有三　無後爲大」の思想と宗法とを口實として上流の人が一夫多妻を辨護して居つたのも、支那人のこの性中心主義の現れである事を忘れてはならぬ。

内山先生の福祿壽の說

支那で帮及び會（無盡講）（第五款及び第六款參照）と共に最も普遍的なるものに福祿壽がある、門の上部或は屋根の上に福祿壽と横書にしてあつたり、その代りに子供を抱いた人と帝王と老人との三つの人形になつて居るものもあり、或は文字と人形と並用して居る場合もある、又客堂の正面に繪として掛け、或は陶器類で三つの人形にして祀られて居る、この人形は結婚式にも必ず使用される、以上の如き普遍的な福祿壽につれては會の場合と同樣日本人の支那通に聞いて見ても滿足な解答をして呉れぬ、支那人に訊ねるとたゞ財人菩薩といふだけで、何うも要領を得ない、然るにこの疑問に對したゞ一人我が内山先生が次の如き解釋を下した、（口繪第一圓參照）第一福を表はして居る小供を抱いた人形は子福者と解し、性慾を象徴すると共に、その滿足を希ひ、第二の祿を表はして居る帝王の人形は祿高を示すものと解し、食慾を象徴すると共に、その滿足を希ひ、壽を表はして居る老人の人形は不老長生を象徴して居る、即ち色食二つの慾を滿足しつゝ壽を保つ事を希ふものである、この說は内山先生の全くの獨創であるが、著者の支那人の社會人性は計劃的本能主義であるとの新說と符合し、また裏書するものである、尙赤衣を着、如意を持つて居る所から見ると、帝王に相違ないものが祿高を示して居ると見立た所などは如何にも支那人の思想に合ひ、趣味津々たるものがある。

第四款　本能滿足の社會的手段

本能と力

前節に說明したる通り、本能には自己保存本能と種族保存本能の二種がある、而して本能は滿足を求める、その滿足の手段として力を要する、その力には腕力、金力及びその集合力等がある、日本に於ては生命財産に對し常に國家權力の保護があるから、支那人の樣に意識的に力を要求して居らぬが、支那人はこれなきにより、常に力を欲する、而して力は個々の力より集合の力の强大なるを知るが故に力の集合を要求される。

力の集合としての互助

然し力は集合しただけでは餘り意味をなさぬから、そこで互助となる、これ即ち後に說く支那の帮の精神である、實に支那人は力を知り、力の集合の働を知る、たゞ支那人は本能滿足の爲めの力を知つて居るだけであるから、歐洲經濟學者の高調する相互扶助或は組合精神とは自ら發足點を異にする、飽迄も支那人式である、だから著者は第二章にて論じた如く、帮を歐洲式にギルトなどと白人の間似をするのに反對する譯で、帮を帮として置けばこそ支那人の本當の精神が解るのだ。

自己本位の互助

それで支那人の互助はシュモラーが組合の第一特長たる同胞精神 Blüderlicher Geist などといふものでなく、互助たるも、飽迄自己本位の互助である、此の點は支那人及支那社會の研究に際し特に注意しなければならぬ所で、支那人の結合は先づ最も自己の近きものよりし、順次緣の遠い所まで廣まつて行く、具體的の帮などもそれを裏書するものでなくて何んであらう、前述の同胞精神は兄弟ならずとも、同鄕者たらずとも、兄弟の樣な氣持になる事で、その間に非常なる違ひがある、この點を儒敎はとつてもつて仁は遠心的に自れより漸次四方に廣めて行くとするのである、これに反し墨子の無差別平等愛說が支那で大勢力とならなかつた事もよく過般の消息を語つて居る。

支那式宣傳の哲學

かくの如く支那人は力の集合の働きを解するから群集を利用する事も知つて居り、群集利用の一方法としての宣傳も上手である、古來よくあつた謠言の一部も政治的宣傳であつた、こう考へると支那人の宣傳の哲學もよく了解出來る、その點はまるで日本人と反對だから會議などによくしてやられる事がある、但し日本人は南京や抗州などに行つて至る所の壁に大書されて居る宣傳文を讀んで吃驚して來るが、第一節で說いた樣に日本式に讀むと飛んだ間違ひを生ずるから特に注意を要する、日本に入る情報などにこうした過大化したものが多いから誠に困つたものである。

輿論としての路上裁判

かくの如く支那人は集合の力を解するので、集合力の現れなる輿論の力を知つて居る、だから輿論には比較的服從する、これを實例によつて證明すると、或る一人の劣紳！が黃包車で街上を揚々としてかけてゐる、すると何處からとなく見しぼらしい老人の花子（乞食）が出て來て車の

梶棒に縋る、日本ならば車夫が「邪魔をするなら」と突退ける所だが、支那では素直に車を留めるか面黒い、所で花子の奴さん車上の御客に「誠に濟みませんが五元だけ貸して下さい」とせがむが、車上から「今日は駄目だ」と一言の下にはねつける、然し乞食は中々引下らず、二人は日本式にいへば外聞をかまず言合ひを初める、物見高いのはお江戸に限らず、直ぐにあたりは黒山になる、すると矢次馬でなく、自然に陪審員の氣持になる群集に向つてその乞食は「此の男はわたしの親爺から散々世話になつて成切したのですが、わたしは不幸續きで乞食に成下つたのです、それで昔のよしみで借金を頼んで居るのですが、薄情にも一文も出して呉れまん」と愬える、日本だつたら客は居たまらず、二十錢か五十錢をなげ出してにげる所だが、そこは遺に支那で、車上から「いや此の男の親父に世話になつたから、先日も多分に貸してやつたが、際限がないから今日はいけないといつて居るのです」とおとなしく應酬するから益面白い、あたりには何時の間にか鐵砲を持つた支那人の巡捕（巡査）が群集に混つて神妙に此の談判に耳を傾けて、ちつとも干渉せぬから、日本人から見るといよ〳〵出でていよ〳〵奇である、日本ならば職務の爲めに自分が無産者たる事も忘れて、さしづめ群集を追拂ふと同時に、乞食を怒鳴り付けて、結果に於ては有產階級の味方となる所だ、すると一人の念書的人らしい先生が群集の中から出て來て、悠々と扇子を使ひ乍ら、車上に向つて「それもそうぢやらうが、一方は文なし先生は持つて居るんだから、まあ三元だけでも出したら如何です」といふと、群集も「そうだ、そうだ」と聲を和して讃成する、そうなると車上の男もおとなしく輿論に服して三元をなげ出すといふ始末である、この實例は支那人が輿論の力を知つて居る事を語ると共に、第十四節でとく、支那人性の複雜化した無意識的な反資本家傾向の例證ともならう。

第六節　社會人性形成の原因

不可抗力な自然の暴威

以上略論したる如く支那人の社會人性は計劃的本能主義であるが、果した然らばかゝる特質の形成を成しめた原因は何處にあるかといふに著者はこれを二方面に求める、第一は自然的原因で第二は人的原因とする、第一の原因中最も威力あるものは天災である、日本の如く國土狹く政府の保護厚き國土にては假令大天災ありとするもその暴力は或る程度に局限され、また間もなく

されるが、支那の如く國土廣漠にして、その上政府の保護少なき場合には、その天災の被害は日本人が殆んど想像出來ぬ、大河の氾溢、大旱魃の如きに對しては本能的に自已を獨で守らなければならぬ事を如何に强く自覺せしむるか、支那內地を知悉し居るものゝよく了解する所である。

搾取階級の跋扈

第二は人的原因で、天災に對して人災(人禍)と稱ふべきである、易姓革命と稱し、支那の如く一國內にて革命の多かつた國は世界にその比を見ない、その涯限なき革命の爲めに支那人が如何に苦めらるゝや、到底日本人の想像する事出來ない、單に革命のみならず治政中でも漢人は苛斂誅求の爲め搾取され續きである、特に漢民族は王朝が何民族なりや不明なりし時代は暫く論ぜずとするも、近代に於ては多くは異民族なりし爲め、この意味に於ても壓迫されて來た、たとひ同民族であつても郡縣制度なる爲め、封建制度に於ける如く自分の國と思はず任期中取得の觀念から兎角搾取される、その上土匪その他からも政府以上の事をやられる、こうなると支那人は常に人災にさらされて居る樣なものだからたまらぬ、而も法律上の保護少なしとすれば、これが支那人に及ぼす心理的影響の大なるは喋々を要せぬ所で、今日の支那人の社會人性を訓致した二大原因である、かくの如くにして年中天災人禍にさらさるゝ支那人が自已の生命を守るに汲々とし、刹那的享樂なる性慾の滿足を求めんとする念强きは自然の數であらう。

第七節　互助的の二大具體象

第五款　集合人力としての幫

幫の本質

著者は支那の社會人性は計畫的本能主義であるとなし、その滿足には力を求め、この個人の力を增大せしめんが爲めには集合を便とし、その集合を實際化するが爲めには互助を要する所以を說明したが、更に進んでその互助の精神が集合人力として現はれたものが幫であると斷ずる、元來幫なる字は相幫或は幫忙の用例に於けるが如く、相助くる意味で、支那人の社會人性に體系付くる爲めに著者は幫は支那式の自已本位的互助精神であると認定したい、而してこの幫なる精神が集合人力として現はれたものが同じ言葉であるが幫なりとする、この幫については根岸佶先生大谷孝太郎氏、馬場鍬太郎氏、長野朗氏及び伊藤武雄氏などの研究があり、大谷孝太郎氏の如き

は「帮には凡そ三義あり、一は同鄉部類をいひ、二は同鄉部類の同業部類をいひ、三には流氓匪賊乞食を下位の極限とする勞働者のギルドをいふ」（上海に於ける同鄉團體及同業團體支那研究第十八號二五五頁」までに行つて居るが、多くは帮が他の事情と結び付いて具體的に現はれた事實の説明や、歐米人の研究の翻譯だけで、その根底を科學的にきはめたものがない。

各種の帮

帮の精神が他鄉に出た同宗族、同鄉間で會館などがない場合に何か問題が起つたのを機會に一時具體化する帮が割合に單純で、日本の研究者の殆んど注意を惹かなかつた所、これには會頭もなければ董事（理事）もない、たゞ同血族、同宗族或は同鄉人の一人或は數人の間に何か事の起つた場合、次ぎ〳〵勝手に傳へられて、聞いた人が勝手に集まつて、其處に一つの團體が出來る、これが帮である、それでその事が解決するとその團體は影も形もなくなる、また地方に於て卽ち各村に同姓の祠堂なるものがあり、大きい所では同姓でも、東西或は上下等と別れて一つの祠堂を持つて居る、この祠堂は土着同族といふ條件と結び付いた帮の一種である、この祠堂はこれに屬するものゝ守護神なると共に、大低寄附財產が附屬して居り、董事制度で、互助機關兼行政司法機關たる帮として動く、學校にもなれば、有福な祠堂では資金の貸付までやる、また他鄉に出た同鄉者間に有力なるものが出來れば最初に説明した帮が永續化して會館になる、この會館は永續的に具體化し、而も相當大きいのがあるので、日本でも可成説明されて居るから、更めて詳論しない、たゞこゝに一言すべきは會館はもと帮の一種で、必ずしも基本金を寄附し、或は會費を出して居る會員ぢけのものでないから、その以外のものでも、その會館の同鄉人であればその恩惠を蒙る事である、例へば或る男が、鄉里を出て中央都市で商賣をしたが、失敗して何うにもならなくなると、自分の方の會館に行つてその由を愬えると、歸る旅費だけは何んとかして呉れる、その場合に鄉里の言葉を使ふので、他鄉のものから胡麻化される心配がない、また親が死んでも棺を支那式に鄉里に持つて行く金が都合出來ねば、會館でその棺を金の出來るまで只で預つて呉れる、それが二年位にもなるんだから日本人から見れば驚かざるを得ぬ、また金が出來ねば鄉里にその棺をとゞけても呉れるといつた具合である、公所、公會、手工帮、青帮、紅帮等は各種の條件と結び付いた帮の一種に過ぎない、但し日本の樣にその名稱を法律できめたものでないから、その名稱もまち〳〵で、日本人に理解し難くい、然し英國の社會などを本の上からでなく、

實地に調べて見ると、支那の事なども理解し易くなる、例へば上海經濟界に勢力ある寧波人の寧波會館は四明公所が經營する單なる倶樂部で、この場合には寧波會館でなく、四明公所が帮の一種の現れである。（四明は寧波の舊稱）

第六款　集合財力としての會

普遍的潛勢力

支那人の自己本位の互助精神が集合人力として現はれた場合は前款の如く帮であるが、次に集合財力として現はれた場合は會卽ち日本の無盡講といへる、一體第三款に說明した福祿壽及び前款に論じた帮と共にこの會ほど支那人間に普遍的なものはない、王宗培氏の所謂「方今之世流行遍及於窮鄉傳授普及於婦孺」である、しかも日本に於けると同樣最近まで支那人及び外人にして支那に於ける無盡講の研究をなした學者は一人もなかつたのである、日本人として支那人の生活を最も實際的に研究された第一人者たる內山先生でさへ餘り知らなかつただけでも一斑を推する事が出來やう、これにも拘らず會の支那人間に於ける潛勢力はその實情を知る何人と雖も驚嘆せざるを得ぬ所、而してこの會は最も自己より近きものよりする集會人力を基本とした帮と異り、集合財力によるものと斷じた傍證は講口の讓渡がある事である、但し事實上は講員が同鄉者、或は同業者なる事も勿論である。（尙支那の無盡講に就ては本書の前に公判した著者の「支那の無盡に關する研究」に詳しい。）

日本の無盡講との差異

支那の無盡講はその組織に於て、またその方法に於て日本のより進んでは居るが、よく似て居る、所がその差異點の最も甚だしいものは支那の無盡講は日本などと違つて餘り潰れぬ事である これは第八節に論ずるが如く、支那人は特に個人信用を重んずる爲めでもあるが、これと同時に元來支那の會の動機が集合財力としての互助精神から出て居るからであらう。著者は例へば長野朗氏の如く歐米式の銀行のみを金融機關なりと誤解し、「支那には金融機關が全く整ふて居ない」とか「農村に入れば全く金融機關がない」（同氏著支那讀本一一一頁）などと妄斷する日本の支那通諸君に何處からそんなことがいへるかと特に敎を乞ふ次第である。

分類標準としての力

著者は今迄支那人の社會人性を說いたから、更に進んでそれが對照となる支那の社會を論じなければならぬ、先づ第一に支那の社會層の種別を見るに、これにはその標準によつて種々ある譯で、例へば資本階級、中間階級及び勞働階級と分られぬ事もないが、支那の如き資本主義が未だ發達しない國に於ては餘り實効がない、著者は支那人が本能滿足の爲め常に求めつゝある力を標準として分けるのが支那に於ては最も適當なりと信ずる、この種別方法によれば權力手段階級、金力手段階級、及び他力手段階級の三となる。

權力手段階級

第一の權力手段階級力は權力を手段として本能を滿足せんとする階級で、官吏及び官吏志望者等である、但し支那では「陞官發財」といつて、官吏になるのは金を得る爲めだといふ觀念があるから、權力を得るのは從で金力を得るのが主たる人間もあるが、兎に角主從の別はあつても權力を本能滿足の手段とするものである、此の階級は大體所謂念書的人で、日本の支那研究者の接する支那人は主として此の階級者に屬する、この階級者が金力を得んとする場合には主として次に述ぶる金力手段階級が對照となる、要するに此の階級は第二次的には他力手段階級ともいふべく第二階級より第三階級に近い。

金力手段階級

第二の金力手段階級は商工業者、農業者及び勞働者等で、支那社會の最大多數を占め、金力のみを本能滿足の手段とするものである、この階級は主として勤勞を以て資本とする、支那には次款に於て述ぶるが如く餘り大資本家は出來ぬが、比較的大金持に屬するものは「陞官發財」的政治家と此の階級の極少部分とである、資本主義經濟組織の發達した國に於ける中間階級が始終資本階級及び勞働階級より壓迫され、また資本階級は中間階級及び勞働階級より搾取する事あるのに支那に於ては此の階級は常に兩階級の一部のものより浚收掠奪及び搾取されて居る。

他力手段階級

最後の他力手段階級とは主として金力手段階級を强奪搾取或は寄生せんとするもの、即ち他の力によつて生存せんとするもので、土匪同様の兵隊、土匪及び乞食等がこれに屬して居る、以上三階級中前述の通り最大部分をなすものは金力手段階級で、著者の支那の社會人性も主として此の階級のそれである、然るに支那に居る日本人或は觀察者は兎角權力手段階級の人と通り一遍の交際をなし、何かの事件に際し他力手段階級の跳梁を見聞するので、これでマスの支那人を誤解する事になる、此の點は更に第六章に於て評論しやう。

遊民の多き原因

前項の如き他力手段階級が支那に多い原因を日本の支那研究者はよく產業が起らぬ事に歸する例へば長野朗氏は「產業不振の結果は失業者國內に滿ち、土匪となり兵士となり」（同氏著支那讀本一八五頁）といつて居る、また人口過剩にも歸する人もある、例へば小竹文夫氏は「支那の社會と政治」なる論文中に「極端な人口過剩であるから失業者が非常に多い、働きたくて仕方がないのであるが働く仕事が何もないのである。」（上海週報第八百十七號一六頁）と斷ずる、然しこ

の二者は何れも當つて居らぬ、即ちかゝる遊民階級多く、その結果兵士となつては軍閥の抗爭を可能ならしめ、土匪となつては掠奪を事とし、爲めに產業發達を阻害するので正反對である、だから支那の兵士は失業者でなく他力を本能滿足の手段とするものである、故に他の二階級は此の階級を「好槌不打釘、好漢不當兵」（元曲）といふ、又支那を人口過剩などといふのは日本式斷定で支那の樣な尨大な國ではそう簡單には斷定出來ぬ、第一土地の廣袤も人口總數にも數說ある、支那で何の根據で人口過剩などといふのか了解に苦む、然し大體論として支那の潛勢的經濟力は土匪的軍隊、士匪及び乞食を養ひ得る事は事實である、決して人口過剩だから土匪となるのではない。

第八款　支那社會の特質

流通性多き社會層

支那の社會層の種別は以上の如くであるが、更に進んでその社會層の特質について研究するに第一は支那の各階級には割合に劃然たる區別がない、嚴密な意味でのCaste Systemがないといつても差支なからう、若し歷史上ありたりとすれば夏殷周の三代だけである、それにしても淡

及や印度やメソポタミヤの樣な嚴格なものでない、卽ち各階級の間に流通性がある、だから支那の念書的人間に「王侯相將寧有種乎」(史記)や、「竊鉤者誅竊國者爲諸侯」(莊子)なる思想がある譯で、この點は日本の維新當時の樣だと思へば間違ひない、これは上る方であるが、下る方では第五節にて說明した樣な天然の威力と人禍の爲め著者の所謂金力手段階級から他力手段階級に墮る事が日本などより極端に多い、從つて支那には階級思想が比較的に薄い事になる、これは自由の本場といはれて居る英國などより弱いから面白いではないか、この支那の階級間に流通性ある事は支那人が社會を形成した場合に有力なる原因で、古代より文明の發達した國中、支那だけが現存して居る所以でもある。

中產階級に對する誤解

支那社會層の第二の特質は支那には中產階級に屬する人間の數が多いといふ事である、著者は前款に於て支那社會を力の標準によつて區分して、支那の社會層の特殊性を明にしたが、單に資本階級、中間階級及び勞働階級の三分類でいふ時には、大體に於て中間階級は金力手段階級と大體同じである、然し嚴密にいへば權力手段階級の大部分と、他力手段階級の一部分とが、中間階級に入り、金力手段階級の一部が勞働階級に含まれるは當然である、そこで資本主義の發達せぬ國の中間階級の大部分たる中產階級を見るに、これに對しては日本でよく誤解する人がある、例へば後藤朝太郎氏などは「支那には從來中流社會がなく、あつても甚だ少く、上流からいきなり下流にうつつて行く」(同氏著「お隣の支那」二六八頁)といつて居る、尤も支那では仁丹は多く五錢と五十錢とが賣れ、日本のモスリンは如何に金をかけて宣傳してもはけぬ事實は後藤氏の說を裏書する樣であるが、この點からいへば後藤氏はシュモラーに似て而して非なるものだ、といふのは獨逸の大經濟學者を專門違ひの後藤氏と一所にするのは一寸おかしいが、元來シュモラーが一國內だつたにしろ收入金額によつて中間階級を限定したのが無理である、卽ちその國の事情、もつと具體的にいへば富の分配狀態特に國民の生活程度によつて各國皆異る、假令一國でも生活狀態の動きによつて變つて行くのだ、例へば日本に於て生活費上中流階級といふ程度が支那に於てはもつと下つて居る、換言すれば名目上の生活費だけから後藤氏が日本式に下流階級と認定したのが、その經濟力から見れば日本の中產階級だつたのだ、支那人は日本人の樣に決して一般には身分不相應の事はせぬ、相當の人でなければ先施公司や永安公司で買物をせぬなどは日本と餘程

違つて居る、そこで議論は仁丹とモスリンの例に歸つて、支那の上の人は五十錢以上の仁丹を買ひ、（日本の仁丹は五錢のより五十錢のが割合に分量が多く、支那式と反對であるから更に五十錢のが買ひ易しい、第十四節參照）モスリンより高い絹物を求めるが、中産階級は假令日本式には出來ても、十錢以上の仁丹やモスリンを買はず、五錢以下の仁丹と上等の木綿に向ふのだ、こうした事から日本人間に支那は中産階級がないなどと誤解されるので、未だ資本主義の發達しない支那で、獨逸學者の所謂舊中間階級が多いのは實地に調査した人の容易に首肯し得る所であらう、また武漢政府が共産主義式に中地主の土地を沒收して失敗したのは此の問題を如實に語つて居る。

大金持の出來ぬ支那

支那社會層の第三の特質は餘り大金持の出來ぬ事である、支那は大國で、且つ物資の豐な所、即ち支那人の所謂「地大物博」であるから、大した丸持でも出來そうなものだが、日本式に考へると案外だ、即ち支那の潜在的富に較べて餘りに金持が少ない、その譯には種々あるが、その主なるものの第一は金持に家族の多い事で、家長以外は經濟權を持つて居らず、他の家族は人に頼る事のみを考へると共に、働いても直ぐに自分のものにならぬから、何うしても怠惰になり、財を積む事を努めぬ、第二は相續制度で、長男又は家の祭りや、女兄弟の輿入支度の爲めに多少餘分にやる事もあるが、大體は男兄弟平等に（新しい親は子女平等）遺産相續をするからである、第三は一人が金持になると同族の連中が集まつて來て、盛に喰ひ潰して呉れる、これが中々大きい、第四は土匪馬賊の掠奪で、殆んど根こそぎやられる事もあれば、人質の身代金で巨額の金をせしめられる事もあり、或はうまく匪徒を擊退しても、平常多數の人々を傭つて警備する入費が大したものである、第五は長い歴史の苛斂で、富豪は苛斂誅求の大目的物にせられる、だから何んない〻事をいつた所が增税をした政府の人氣は一遍で落つるのは覿面である、第六は政府の沒收で、勝手な名目をつけて大富豪の全財産を沒收もし、また失脚した督軍督辨などの全財産を沒收するのは朝飯前だ、第七は軍閥の巨頭或は富豪連がその財産の沒收せらるゝを恐れて妾や親族等の名義にして置いた財産が當人の沒落、或は死後行方不明となることである、こうした種々の事情から支那には中々大富豪が出來ぬのだ。

第九節　個人信用の尊重

個人が政府を保證

以上四節に亘つて總論として支那人及び支那社會の眞相を論じたが、次に各論として、その支那人の社會人性及び支那社會が種々相として現はるゝ主なる各場合を略說しなければならぬ、第一は支那人が社會に於て個人的信用を尊重する事である、即ち支那人はよく信用を重んずる、然しこれは個人の時だけで、政府になると內外に對し餘り的にならぬ、だから政府より個人の方が信用される、例へば或る官廳に民間から物を納入した場合、日本だつたらその支拂は個人より確實な譯だが、支那では例へば大臣等の責任者が代つたら、それは前任者のやつた事だからと嘯かれたりする場合があるから、その契約當時の大臣を個人としての責任を負はして置かなければ危險な場合が多い、日本だつたらそんな保證をして呉れといふ人もなければ、また役人の方でもそんな事は絕對にせぬ、これは支那社會に於ける個人信用が如何に尊重されて居るかを如實に語るものであると共に、支那人の對政府觀念を端的に說明して居る、こうした消息は支那に隨分長い日本人でもよく呑み込めない所である。

生存の爲めの個人信用

かくの如く支那人は社會に於て信用を尊重する、だから個人が賭博で負けた場合、自分の商賣を潰してまでしてその金を支拂ふ、何うしてこう個人信用を尊重するかといふと、この個人信用尊重が結局自己保存上得策だからである、といふのは支那では法律の保護が薄いから個人信用を重ずる外何等取引上の武器がないからに過きぬ、この點になると法律の保護になれて居る日本人より信用に於ては餘程安全である。

錢莊の威力

それで錢莊が自分の資本金の何倍かの莊票を拂出して、これが何處へも殆んど間違ひなく現金と同樣流通するのを日本の金融業者などがミステリーだといふが、支那人からへば何んでもないこの信用尊重の一の現れに過ぎない、また錢莊が個人に對して如何に對人信用で自由な貸出をし

て居るか、日本の金融業者や金融學者のよく注意して貰ひ度い所で、形式上の錢業公會の章程ばかりの飜譯では駄目である。

第十節　利害に明き支那人

計數中心

支那人は金錢第一主義だとよくいはれて居るが、自己保存及び種族保存本能の滿足手段の一としての金を尊重するので、決して生命以上に之を措むものでない事は第三款に於て論じた通りである、だから決して金錢第一主義ではない、然し支那人は金の力を知るが故に利害には明るい、例へば支那の小供は自分の着る衣服がどれだけの尺が要るかをよく知つて居る、また支那の會卽ち無盡講の掛金は日本の無盡講の進化した積りの營業無盡の掛金より大體に於て合理的である、井上紅梅氏の「支那人がどんな無學なものでも金勘定が早く、商賣がうまいといふのは常に麻雀で算術を練習して居るからです」(同氏著麻雀の取方六頁)などは飛んでもない話で、支那人は計數に明るいから麻雀の様な計算の複雜な遊戯が民間に行はれて居るのである。

支那人の買物振り

こんな譯だから支那人の買物振りはとても徹底して居る、東京人の買物振りと大阪人の買物振りの差の何倍かの相違が日支人間にある、例へは勞働者が朝お粥を買ふ場合に中々最初に買はぬ半分位賣れてから買ひ出す、これは猫舌や味の問題でない、要は薄いか、濃いかの關係である、それだけ勞働者が買物をする事に際して氣をつけて居るのだ、日本式にいへば實に馬鹿馬鹿しい位であるが、これが事實なんだから仕方がない。

面子問題

かくの如く支那人に計數本位であるが、一方に於てはよく支那人は極端に面子を重んすると日本人にいはれて居る、然し著者の見る所では日本人のいふほどのものでない、成程面子をやかましくいふが、この面子を日本の俠客の所謂顏などに譯すから間違ふのだ、また清水董三氏の如く體面と譯しても困る、(同氏著新支那の斷面一〇三頁)支那には體面といふ字は別にある、つまり日本語にあてはまる言葉がないのだ、その面子には何時でも利害打算が伴つてゐる、長野朗氏などが、「ボーイでも人のゐる前で毆り付けられたりすると、顏を潰されたと言ふことになつてす

ぐ暇を取つて出て行く、（支那の社會組織一四九頁）といふが、これは支那人は第三款で說いた生命第一主義からいくら嗔嘩しても、よく〳〵の事でなければ打架卽ち毆りけつたりせぬ、だからこれは面子の問題は副である、漢口問題の如きも日本人の氣憶に新なる所、兎に角支那の面子には必ず何か實際的の事が伴ふて居る、莊子にある、「名者實之賓也」を普通の意味に解するとよく此の面子問題が解る、また淸水董三氏は「私の一友人が盜みをした中國人の下僕を毆打した時、その下僕は「人を毆るなどとは怪しからん、面子を何うして吳れる」と啖叮を切つてその友人を吃驚させた」（同氏著新支那の斷面一〇六頁）といつて居るが、これは恐らく支那人は假令物を盜んでも返せば罪はないものとの一般觀念から、返したのを毆つたので怒つたまでゞ、前例と同樣面子はたゞ口實に過ぎぬ。

勞働者に對する誤解

支那人は利害打算に明るいから、面子卽ち名より實をとる、だから上海邊に出て日本人の家庭などに働いて居る阿媽等は鄕里に相當の地面を持つて居るものがあり、村松梢風氏などが（同氏著支那漫談九八頁）極貧人と思つて居る黃包車夫にもこうしたものがある、これは自分の土地は人に高く貸し、自分は出稼した方が結局得だからで、日本人が威張つて使つて居る阿媽の方が却つて金持だといふ例は決して珍らしくない、これだけ實際的なのだ、和辻哲郎氏などが「無感動であるが故に彼等は疲れる事を知らず倦くことも知らない」（「支那人の特性」思想特輯支那號七頁）などといつて居るが、勿論大陸的國民であるから日本人より神經過敏ではないが、彼等とて中々氣を遣つて居る、その例は黃包車夫で餘り支那人を知らぬ日本人が支那の車夫は梶棒の向つた方に眞直ぐに何處までも走つて行くなどといふが、これはとんでもない誤解、角々で何れに方角をさゝれるかよく注意するのである、また第五節に論じた如く大陸の自然の暴威に鍛へられた上に、第十二節に論ずるが如く恐ろしく實質的な支那食に養はれて居るから日本の勞働者などより强いので、これを一に無感動に歸するのは餘りに妄斷であらう。

銀行券の取付

こゝに支那人が如何に利害打算に明であるかの適例がある、或る銀行で、假令その銀行が危險な程度まで兌換券を發行して居る事が知れ亘つても、若しその銀行券が一般的に行き亘つて居れば、兌換取付はその券の所持者の共同の損害否自己の損害となることを知るが故に、決してやら

ぬのた、また第三節に論じた通り支那人の通貨觀念が異つて居るから、預金の取付はその銀行の銀行券を以て滿足せず、必ず硬貨を要求する、兎に角危險だと思ひ乍らも流通させる所が如何にも支那式である。

第十一節　實際的な支那宗教

殆んど形もない儒教

支那人特に漢人の宗教は支那人式に實に實際的である、葬式の時に錫包と稱する馬蹄銀に象つたものを使ふ所などはよく支那宗教の實際的な所を語つて居る、この點は支那に於ける回族、蒙古族及び西藏族と大に異る、大體漢人間の宗教は儒教、佛教、道教及び基督教の四つであるが、儒教が果して宗教であるや大に疑問とする、假りに宗教とした所が、現在の漢人民衆に何れだけの力があるか、まづ殆んどないといつた方が妥當であらう、ある支那の有名な學者が著者に向つて儒教は昔のことで今はあとかたもありませんといつたのは蓋し至言であらう、漢人が親を尊ふのも絶對無二のものとして天と親を尊ふだけで、一般民衆に於ては儒教の影響といへぬ、それに小供が死んだ場合、親がその棺の前で散々不孝を罵倒したり、或は貧乏人がそつとその棺を道傍に捨てゝ來るのを儒教の親に先立つ不孝を責むるせいにして居る人もあるが、支那では最も頼り得るものは自分に最も近い子であり、その子が亡くなれば頼るものがなくなるので、腹立しくもあり、また經濟上から棺も捨てるので、決して儒教の影響でない、大道廢有仁義は老子の孔子の說に對する批評であるともいへる。

道教化した佛教

支那に於ける現在の佛教は日本と異り餘り宗派がなく、最も勢のあるものは禪宗である、然るにこの禪宗なるものは自力宗で、餘り後世をいはぬ、最も實際的のものといへやう、之れに今日の佛教は實際上餘り道教と異る所なく、たゞ葬式の必要以外大した意義がない、或る意味に於ては教理は兎も角、實際上支那の佛教は殆んど道教化して居るといつても差支ない、支那の葬式で道教の道士と佛教の和尙が仲よく一所になつて行く所など日本人からいふと一種の奇觀である。

現世本位の道教

道教はその實際的現世的なる所が面白い、換言すれば道教は原始的功利宗教である、その教理

には種々あり、例へば人の壽命はちやんときまつて居るものであるが、特別によい事をしたものは壽命を延してる貰へるとか、もつと極端なのになると家人の平常の素行を最も知つて居る竈の神が毎年末に天上して天帝に報告すると、それによつて人壽の命が延されたり縮められたりするといふから面白いではないか、道教の寺に行くのも決して後世を願ふものでなく、現世の爲めである、また道士の中には伙居道士といつて觀或は宮（寺）に入らず、俗人同樣の生活して居るのがあり、その讀經費が安いなどいふのが如何にも道教らしい、一體道教は老子の思想だけでなく、支那人の要求する各種の思想が混合して居るので宗教として一番勢力がある。

利用さるゝ基督教

基督教は表面上中々盛な樣であるが、要は支那人に利用さるゝに過ぎない、その證據には日本の樣な殉教の歷史が全く見る事も出來なければ、支那で最も歡迎せらるゝは實際上の授產等の事をして居る舊教であることでも解る、だから日本の對支文化事業などは實につまらぬ事で、著者が其大新聞の社說を書いて居つた當時も大に反對した次第である、それで支那人はよく基督教信者の事を吃教人といふ、著者は第三款に於て支那に殉教者なしといつたが、これに對し或る人は北淸事件の際の事をいつて居るが、あれは併合前の朝鮮に於けると同樣、基督教會堂に行けば生命安全なりとの觀念によつた思はざる失策で、決して殉教でなく、要するに基督教の利用がたまゝ殉教の樣な結果になつたに過ぎない。

第十二節　實質本位の支那食

世界一の經濟食

支那食は最も支那人を端的に說明するものであらう、即ち支那食は自已保存本能と種族保存本能の滿足手段に最も適したもの、換言すれば支那食は最も滋養に富むと同時に、性慾亢進にも最も有効なものである、その上經濟的に出來て居るのだから、支那食はこの意味に於て世界一の食といはねばならぬ、然し著者の所謂支那食なるものは決して日本人等が行く高級な支那料理屋の料理だけの意でない、小竹文夫氏が「支那料理は今日世界で最も優秀な料理とせられてゐるが、一方豆油麻油とを直接用ひねばならぬ程極貧階級のある所に、かゝるものが發達してゐるのは健實な社會でない事勿論である、支那料理が發達したのはこれを發達せしめるやうな有富有閑階級

が一方に存在したことで」（自然環境と支那社會　支那研究第二十號五〇頁）といつた樣な極限されたものでない、（著者には何故こんな區分をしたか、豆油麻油を使ふ料理が何故そんなひどいものかの理由が解らぬ、）實際支那人一般が日々常食して居るものをいふのである、この支那食は如何に經濟的なものであるかの理由は著者が曾つて大阪毎日新聞紙上に於て、また拙著『經濟的亡國の危機』に於て評論した所であるから再論しない。

朝食の種類

以上の如き世界一の經濟食を更に具體的に說明する爲めに、主として勞働階級の食事の一例として上海中心の各種朝食を擧げやう。

第一、大餅　タアピン

メリケン粉に鹽味或は甘味をつけて巾一寸長さ七八寸以上の二流れの長方形、菱形、短册形或は薄丸形等に燒いたもの　一個三十文。

第二、老餅　ラオピン（山東餅　セエトンピン）

メリケン粉に多くは鹽味、或る場合は甘味をつけ、種を入れて厚さ五分、直徑一尺位の圓形にやいたもの、一枚四百文なるも、切賣する故に三十文でも五十文にもなる。

第三、酒娘餅　チユウニヤンピン

メリケン粉に少し甘い味を付けて酒娘（かたあま）を入れ、直徑二寸厚さ四分位の圓形に燒いたもの、一個三十文。（口繪第二圖參照）

第四、餑餑　モウモウ

メリケン粉に酵素を容れて鹽味又は無味に蒸したもの、形は鼻高饅頭或は眞宗の佛前に供する飯の如きもの、一個三十文。

第五、肉包子　ニヨウポツ

メリケン粉の中に豚肉を入れて無花果の樣な饅頭にしたもの、値は物によつて倍位までも違ふが、勞働者向は一個三十文。（口繪第二圖參照）

第六、猪油餅　ツウユウピン

メリケン粉に切つた臭菜を交ぜ、豚油をぬり鹽味をつけて可成り薄い圓板形に燒いたもの、一個三十文。（口繪第二圖參照）

第七、油條　ユウデイオ（油拵捻　ユザクエイ）

メリケン粉をコネて鹽味をつけ、油で約一尺位の細長に揚げたもの、次に說明する煮飯などに容れて食ふ、一本三十文。（口繪第二圖參照）

第八、煮飯　ツウフエー

粳に糯を少し交ぜて蒸したもの、日本の白蒸に似て居る、五十文から何程でも摑つて呉れる。（口繪第二圖參照）

第九、煮飯糕　ツウフエコウ

粳と糯とを半分位づゝに交ぜて牡丹餅の中味の樣に煮、約長さ二寸巾一寸厚さ五分位の長方形に切つて油で無味に揚げたもの、一個四十文。

第十、粥　チユウ

鹽味或は甘氣味の粥、主として混物があり、一般には落花生或は蓮根、多は獸肉、鳥肉、魚肉等、日本の丼より少し小さい一碗で五六十文からある。

第十一、飯芋　フエスウ

甘芋をそのまゝ煮たもの、朝食としては百文位。（燒いたものは主として間食）

以上は普通一般の主食物であるが、大體に於て產地關係上北部はパン類、南部は粥類が多い、この外

第十二、麵　ミエン

がある、日本のうどんで、勞働者より多くは店員等が食ひ、また朝食よりは夜食に多く、或は間食にされる、かけは日本の分量の約三倍位で、一碗百文である、種物には火腿麵（ハム入）鷄糸麵（細かに切つた鷄肉入）鰆魚麵（川蛇入）魚麵（燻魚即ち鯉の切身を砂糖醬油につけて干し、これを油で炒つものを入れる）蝦仁麵（生の小さい川蝦入）などがあり、夏には冷麵もある、その他

第十三、飯　フエー

は朝食よりも主として晝晩食で、日本の茶碗の四杯分位の一碗が百二十文、二回から八十文ふ具合が原則である、以上の外「季節物」としては

第十四、年糕湯　ニイコウトン

得に說明する日本の餅の一種たる年糕を鹽味のお汁に容れたもの、日本の雜煮に似て居る、一碗百文位で、正月前後に食ふもの。

第十五、粽子　ツオンツー

芦の草で六面に約日本の茶碗一杯弱の糯を包んで煮たもので、糯だけのもの、或は小豆を入れたものは一個三四十文で、主として勞働者向き、火腿、猪油入りは五六十文から七八十文、五月の節句前後に食ふもの

等があり、主として間食であるが、たまには主食物となるものには

第十六、方糖糕　フオンタンコウ

メリケン粉のカステラの樣なもの、長さ二寸五分、巾一寸位、厚み一寸五分位の一切で三十文

第十七、黃荳沙饅頭　ドイツーマエードウ

メリケン粉の皮に小豆の餡を入れて酒娘餅の樣に燒いたもの、一個三十文。（口繪二圖參照）

第十八、年糕　ニイコウ

日本の餅と似たもので、糯と粳の粉を廣東下駄狀を延した樣な形に搗いたもの、主として無味、時には甘味、豚の油をつけて燒いて居る、一本四五十文であるが、家によつて大きさと値が違ふ。

第十九、猪油糕　ツウユウコウ

豚油の白く固まつたものを容れて甘味をつけて作つた長さ三寸、巾一寸、厚さ三分位の糯の餅、燒いて賣つて居る、一本四五十文。

勞働者の食費

以上の樣な廉價な朝食で勞働者は銅貨十二枚から二十枚あれば濟むから、日本の金に直せば約四錢から七錢である、また一日の食料費を見るに、勞働者一人が外で食へば日本金で二十錢位、一ケ月で五六圓に過ぎない、家庭を持つて二人で內で食へば月八圓位で濟む、こうした世界無比の廉價な食事が學理上からいつても頗る滋養に富んだもので、その上中產階級の人も大體は同樣のものを食ひ、上流でも朝食だけは殆んど同樣で、日本の相當贅澤した人でもうまく食へるんだから羨ましい、食物で隨分我慢した日本の一靑年に一度支那の勞働者の常食を食はしたら、今度そつと自分で買つて食つて居る位のものである、こうした支那食を日本の支那研究者の何人が試食したであらうか。

日支料理屋の對比描寫

以上によつて支那料理なるものが如何に經濟的に出來るかといふ事を會得出來ると思ふが、單に料理そのものゝみならず、器具その他一切經濟的である事を最も極端にコントラストをなして居る日本と支那の料理屋について說明すると、幸ひ內山先生が萬華鏡の第三卷第三號に書かれたものがあり、これが非常によく描寫されてあるので、次にこの一節を借用する事にする。

高い長い塀を圍らした堂々たる門をはいつて廣い植込みの庭を通つて電燈まばゆい御殿の樣な家の玄關に立つて京人形の樣に飾つた仲居さんが案內に出て與れる、導かれてお二階へ上る、金襖や金屏風に圍はれた、青い疊の大廣間天井は薩摩杉の榊形、長押の大額は貫名海屋の名筆、床の掛軸は竹田の山水、青磁の香爐に古銅の花瓶には寒椿の一輪が生けてある、運ばれる坐蒲團は我等の手足が觸はるとバリ〳〵と音のする八反織縞、桐の胴丸の手あぶり、イブシ銀の茶卓には九谷の茶碗、高蒔繪の膳碗、有田淸水の皿鉢、嗚呼何んといふ美しさであろふか、實際目をうばうものである、之れ實に日本料屋が常に專念して居る爲である、車馬に通行の路さへ不自由な街軒を並べた料理屋の入口は一方では油でニシメた樣な着物を着た男が二三人、卓子

にもたれてチユンと手鼻をやりながら小蝦仁のムキ身を積んで居る、庭には穢ならしい男衆が何やら聲高にシャベリながら出入して居る、此の人々に何か指圖して居る二三人は鹿爪らしく帳面を前に開らいてミミズの樣な字をのたくて居る、コツク場から來る油の煙が濛々として先づお客を煙に捲く、二階へ上ると油着物の茶房が油ピカリの面をヌツと突き出して先生幾個人と聞く、兎に角案內されて房子へはいる、房子と云ふても丁度目かくし位ゐのペンキ塗の板で仕切られた四疊半位ゐの廣ろさである、卓子が一個と橙子が幾個か置いてある圓臺を持つて來て卓子に載せて紅い布をかけると之れで八仙卓子となつた、毛巾が來る、多くの場合は鼠色になつて居る、卓子の上には高つきに盛られた水菓、糖果、皿に盛られた四冷盆、象牙の箸はイガイ飴色になつて居る、順々と運び出される妙菜、炸菜、烤菜、素菜、葷菜、湯、見る目に美しいと感じる樣な物は極めて少くない、多くは猫のヘド然たる我等の目には見るからに氣持ちの惡るいものばかりである、おまけにソレがカケ椀、カケ皿に盛られて居るが故に一層感じが惡るいのである。敢へて厨房が便所や汚水溜と雜然同居して居ることなどは云ふ事を止めるが、之れが實に支那料理屋が常に無關心で居る點である。

華僑の發展

支那人は國内に植民する場合にも、海外に移民する場合にも、政府を頼らず、政府の御厄介にならずに世界至る所に進出して支那人の社會を形成して居る、特に南洋に於てはその勢力最も強く、濟南事件の折に日本との開戰免れ難しとの電報一本にて、六月一日から九日までに百六十九萬元、その後を加へた合計五百萬元を國民政府に送つた位の勢力がある、支那人は國内に於ても、海外に於ても政府を的とせず、自力と帮や會で行くのである、支那人は事實に於て政府を頼つては却つて損と思ふから中華國民としてゞなく、支那人として社會を形成して、飽くまで發展して行く、こうした思想は萬事御役所頼りの日本人には中々了解出來ない。

刑事問題の個人間解決

特に面白いのは支那の刑事問題で、誘拐された場合などでも、色々の手から行方をさがし出し、直接に値をきめ、身代金の授受をなす、盗品でもこうした事がよくある、こんな事は殆んど政府に頼らぬ、抑も警察制度は日本が世界一ともいふべく、歐米諸國などは餘り感心出來ない、村松梢風氏などが上海を如何にも魔の都の様に「支那漫談」等で書き立てゝ居るが、これは上海に限らず、歐米諸國でもよくある事である。

支那人の法律思想

こうした支那人であるから自分が的にせぬ政府の作つた法律なども餘り眼中にない、日本では法律が制定さるれば、これを知ると知らざるとに拘らず、直ぐに强行出來、國民もよく服從するのは當然であり、また至當であるが、支那では違ふ、勿論地域の廣い關係もあり、古來より禮記に禮を行ふにはその地の俗に因るとある通りの政治方針だつた事もあるが、大體ケースに自分として都合よく法律があてはまる時にはその適用を進んで受けるが、これに反する時には飽まで常識論を通す、また裁判なども出來るだけ受けぬ様にする、この點だけを特に注意した研究者が支那人は無政府主義者だといふは一應尤といへよう。この觀念が特にはつきり現はれて居るのは通貨の場合である、支那人の通貨觀念は第三節に於て一度論じたが、假令民國三年二月七日敎令第

十九號公布の國幣條例があつても、そんなものは眼中にないのだ、それだのに久重福三郎氏が「本位貨の相場が日々變動するといふことは誠に奇怪千萬な」り（「支那貨幣に就きて」七頁）といつて居るが、これは全く日本人の見方に過ぎない、特に支那人の賭博觀念が日本人と違つて居るから面白い、即ち支那では賭博の仲間に賭博を商賣とする人間が交つて居らなければ賭博にならぬ、如何に大金をかけても遊戯に過ぎない、金を物としか思つて居らぬ、この觀念は單に民間だけでなく、裁判官でも認めて居る。

第十四節　無意識的反資本家思想

黄包車夫階級の心理

支那人は前述の如く自已本位の互助精神に富んで居るか、これが段々複雜分化して來て、一般民衆は反資本家主義、無產階級編重を形成したから、支那人の社會人性は益他國民から理解されにくゝなるのである、例へば黄包車は上海ならば工部局の規定があるが、その有無に拘らず苦力が乘つた場合の方が、紳士のより必ず安い、もつと具體的にいへば、歐米人や日本人が一番高く、支那人の自動車より人力車を選ぶ人がその次で、それから支那の下層階級といふ順である、だから日本人で同じ距離の所を乘つても、洋服を着た場合と支那服を着て支那語を自由に話した場合とで賃銀を受取る態度が違ふ事が多いから面白い、それは外國人だから高く、自國人だか安いといふ譯でなく、車夫の頭で客を見て、財產的階級上の差別待遇をするに過ぎない、支那の車夫が愛國的或は義俠的精神からこうした擧に出るのだなどと思ふと大間違ひである。

社會政策的な質屋

特に面白く感ずるのは支那の質屋（典、當、押或は質）の營業振りだ、即ち日本に比べて非常に貧乏人に具合よくなつて居る、第一同じ質草でも貧乏人には多く貸す、それに流質期間中は利息をとらぬ、また利息のおどりも日本の樣に月でなく、日だから借りる方の負擔が非常に輕い、こんな所は新しがり屋の、歐米の本や雜誌の論文ばかりを飜譯して納つて居る日本の社會科學者から特に研究して貰ひ度いものである。

下層級階級本位の小賣値

これと同樣支那の買物は、同じ物でも苦力の買ふ値と、これ以上の人が拂ふ額とは違ふ、また

同じ人間でも、例へば菓子ならば一個づゝ何度も買つたのと、一纏に一袋買つた折とはその値段に大分距離がある、日本ならば資本家が註文しやうが、無產階級の人が買うが同一値たるは正直な小賣商として當然の事だ、また一個一個物を買ふより、一纏にした方が安しいのを原則とするが、支那では金のないものが買つた方が安く、一緒にして買つた方が高い、これは店の連中の無產階級を保護せんとする社會政策的意識からでなく、單に習慣的無意識的にやつて居るに過ぎない、その外結果論であるが、日本に比べ小賣値段との差が少い、これは日本では人口關係や、物資の配給組織關係等から卸賣値と小賣値との開きが大きいのに、支那では卸値と小賣値とが非常に接近して居り、全然同じ場合もある、物價がどん〳〵下つて行く場合、小賣商が一時的に手元の關係から已むなく投賣する樣な例外は兎に角、そんな事が始終あつてもたまるものかと日本商人はいふだろうが、支那では事實なんだから仕方がない、これは全く支那の貨幣關係から來た事で、例へば問屋から小賣商に六ヶ月の期限で商品を卸すとすると、小賣商は同値で賣放しても、その賣上金を六ヶ月以內廻して變動の激しい對外爲替或は國內のエキスチェンヂをかせいだ方がもうかるチャンスが多いからである、こうなると假令卸値よりも安く小賣しても必ずしも損でないといふ計算になるから、小賣値段が案外安く、中下層社會には都合がよい事になる、この問題は支那の生活費に重大な關係のある事で、特に注意しなければならぬ所である。

第六章　支那の新傾向の解

支那の理想論と民衆

著者は以上二編、五章、十四節、八款及び七十二項に亘り支那を研究したが、著者の論斷に對し向けらるべき非難は必ずや、著者の見たる支那は古き支那なり流の所謂新しがり屋の議論なるべきを推し、豫め一應の議論をする次第である、第一は支那は何時までも古き支那でない、著者の見た支那は古き支那であるといふ議論であらう、これは一應尤の事で、支那が進化しつゝある事は著者も認める、然し所謂念書的人中には理想家があり、その所論が著書に、雜誌に、新聞紙によつて日本に傳はるが、これは理想論たるに止り、支那民衆とは大した關係がない、あるにしても大海の一滴にも及ばぬ。

煽動者の數

また時勢に志を得ざる政治家及び勞働運動の煽動者の行動も新聞紙によつて日本にセンセイショナルに報道されるが、これにも一般民衆は無關心である、たゞ計畫的本能主義者の支那民衆はその時の都合によつて、一時これを迎合するのは勿論の事といはねばならぬ、然しこの民衆は決して一の信念から動くのでない、單に御都合主義である、これを日本の若い勞働組合運動謳歌者などに見せると夢中になるのだ、その證據に國民黨内に無產黨が入つて居つた當時、あの猛烈な民衆運動が清黨運動後は火の消えた樣ではないか、支那の煽動者は諸外國よりも可成多く、支那の特產物といつてもよい位であり、共產黨の一部は今猶或種の潛航運動をやつて居るのは事實であるが、要するに煽動者は一般の支那大衆に對し九牛の一毛である。

第八章　支那人及支那社會の將來

日本留學生の變化傾向

そこで最後の支那人及び支那社會の將來である、支那は世界の謎とされて居るのに、これが將來を推測するのは大膽至極といはねばならぬが、本書が支那人及支那社會の研究なる以上、これを敢てせねばならぬ、著者は前章に於て支那の理想論と民衆との關係を述べたが、これを傍證す

るものは、支那人の日本に留學した新人の變化傾向である、即ち京都大學邊で河上博士などのブロパカンダ的講義にしつかり心醉して支那に歸つて來ると、盛にマルクスボーイ式を發揮するが、段々自國の眞相にふれると漸次こうした傾向が薄くなつて行くから面白い、これは著者が本論に於て論じた所を會得された人士は簡單に首肯さるゝ所であらう。

何處までも支那社會

果して然らば最後の問題は支那社會の將來、近頃流行語の「中國到那裸去?」（支那は何處へ行くか」である、然し何處へ行くかはベテロや、シュンケキッチや、乃至はトロッキイの言で、著者は支那社會は何處へも行かぬといひ度い、即ち支那社會はそう簡單に變化せぬ、支那社會は何處までも支那社會であると斷言する、だから支那の赤化問題などは論ずる要がない、この點は露國の如く數百年間民衆が奴隷として、中頃假令農奴が解放されたにしろ、土地に縛り付けられた半奴隷として何等變化なき歷史を辿つて來たものは、一朝の事變に會つて大變化を來したが、第六節に述べた樣な千年以上自然及び人的に淘冶されて來た支那人の社會の如きはそう一朝一夕にして變化するものでないのである。

——（完）——

昭和六年四月二十四日　印刷
昭和六年四月二十七日　發行

支那人及支那社會の研究

定價　金一圓

著者　池田龍藏　東京市外世田ヶ谷町下北澤七五九
發行者　池田龍藏　東京市小石川區竹早町三六
整版者　宮川辰信　東京市小石川區柳町二九
印刷者　小宮山清五郎

不許複製

發兌　東京市外世田ヶ谷町下北澤七九五　池田無盡研究所

GANNANDO HOTEN
巖南堂書店

OL
NO. 12897

4097